

「愛という奇跡を求めて」

エペソ人への手紙 5 : 1 - 2

September.15.2024

エペソ人への手紙 5 : 1 - 2 (パウロ)

Preface

先週は、1節の御言葉から、神に倣う者・神に形どられる者として召し出されるという待遇を受けた神の子という身分、そして、それに伴う私たちに向けて持っておられる神の約束について教えられました。

今朝は、続く2節の御言葉、「愛のうちに歩みなさい」という御言葉について考えていきたいと思っております。

エペソ書の著者である使徒パウロが、「愛のうちに歩みなさい」ということを話すために、何をその譬えとして挙げているかと言いますと、イエス様が私たちがどのように愛されたのかということの譬えにあげております。

即ち、キリストを信じる人々に向けて神さまが持っておられる究極的な目的は、「イエス様のように愛する者となる」ということです。

「私が神に愛された」ということに留まることがキリスト教信仰ではなく、「愛されたように愛する」ということが、神さまの意図、目標、期待、ご計画です。

漠然としたものではなく、具体的な内容、形、姿の伴った愛するということ、私たちが神さまから求められているということです。

Part One

私たちが信仰を与えられ、キリストを、神を信じる者として信仰生活を始めた時、何をもちてその信仰の良し悪しと言いましょか、内容を吟味するのと言いますと、「叶った、叶えられた、聞かれた」ということ、「どれだけ祝福されたのか」というような言葉で言い表すものたちだと思います。

「唯一まことの神様を信じてみたら健康が祝された、暮らし向きが良くなり経済的にも祝された、社会的地位において祝された、祈ったら雨が止んで快晴に恵まれた、全然足りなかったけれども不思議と満たされ上手くいった」というようなことをもちて、父なる神キリストを信じるという信仰を実感したいと思うようになるでしょう。

実際に神様は、私たちが分かりやすく信仰を実感出来るようにと、それらのことを豊かに与えて下さることがあります。

もちろん、喜ばしい、感謝な祝福ですよね。

そして信仰が進むと、今度は、罪や義という問題が台頭してきます。

「何が義で何が不義なのか、何が罪で、何が正しいのか、何を神さまは忌み嫌われるのかということを見極めたい」と、それらを見極めることをもちて、

自らが神によって聖別されたクリスチャンであるという自意識を持つようになって行くことでしょう。

そしてさらに進むと、ただ罪や義を見極めることをもってクリスチャンだと認識するところから、「キリストによって義なる聖なる神の子とされたからには、具体的にどう歩み、どう生きるべきなのだろうか、どう生きることを望まれているのだろうか」と考えるようになって行くでしょう。

そして、今日のような御言葉を見出します。

「愛のうちに歩みなさい。」

神様が私たちに求めておられることは、義や不義を見極める程度のことではなく、その義こそ愛であるということに行き着くことです。

何が義で、何が不義なのか、何が正しくて何が正しくないのかを、ただ見極めて満足に浸るのではなく、愛を求めておられます。

愛のうちに生きること、愛のうちに人と接すること、実存的・実際的な愛に生きingことを求めておられます。

神さまがキリスト者に求めておられる究極的な目標は、「愛のうちに歩むこと」です。

このことを一人思い巡らしていると、伝道者の書のソロモンの言葉、「あなたは正しすぎてはならない。また、あなたは悪すぎてはいけない」という言葉が思い出されました。

クリスチャンである、クリスチャンとされたという自信ゆえに、自分のことを正しい者だと錯覚し、判断力や識別能力に長けているんだと思い違いをし、バッサバッサと人を切り捨て、裁きまくり、「その裁きは、愛するために先ず必要なことだ」と、聖書には一切書かれていない聖書の教えのようなふりをした自らのうちに作り上げた偽りの教えを、聖書の教えであるかのように握り締めている私自身の姿を思わされました。

正に、正し過ぎる姿ですね。

また一方で、「どうせ悪いんだから、もうどうだっていい。こうなったら開き直って、陰険な悪さを、陰湿な悪さを持ち続けながら、それを磨いて、聖なるふりをしながら生きて行こうじゃないか」と思えてしまうことがあります。

「あなたは悪すぎてはいけない」という教えに反する思いですね。

愛するということを語るだけでいいならば、そんな大して難しいことではないように思います。

いやむしろ、容易いことかもしれません。

愛を語ることをもって愛に酔い、愛を分かっているような素振りに酔い、自己満足の思いで気持ち良くなれるかもしれません。

でも問題は、聖書は、そんなことを「愛だ」と語ってもいなければ、教えてもいないし、求めてもいないということです。

聖書は私たちに、愛することを求めます。

「信仰とは、座って話を聞いて、『うん、そうだそうだ』とうなずいていることではない」と、聖書は私たちに教えて下さいます。

Part Two

でもそうかと言って、先週も教えられました通り、愛することは、そんな簡単なことではないですよ。

頭では分かっているつもりだけれども、実際にそうなると、頭に体が全然ついて来ないということを否応なしに経験します。

しかも聖書の教える愛は、家族愛でもなければ、友人同士の愛でもなく、仲間同士の愛でもない。

ただ一択、「敵を愛する愛」ですね。

でも、「聖書が教えているから実践してみよう」とした瞬間、突き付けられるのが、無理、無茶、不可能、あり得ないという挫折です。

そこで、「じゃあ、もうしょうがない」と、その挫折を開き直りで解決しようとする、「愛する、愛したい」と言っていたはずなのに、その愛の対象であるその人を裁くことをもって表現してしまいます。

頭と体が一致しないどころか、頭も体の一部であって、同じ穴のムジナであるということを露呈してしまいます。

聖書もこのことを良く分かっています。

面白いことに聖書は、「愛しなさい」と教えているにもかかわらず、その教えの実践の不可能さに最も大きな比重を置きつつ、その愛の不可能さから、愛を語り始めます。

そして、その不可能な愛を説く上で必ず語るのが、「キリストがあなたがたを愛したように、キリストが私たちを愛して」ということです。

聖書が愛について語る時、どこからいつも始めるかと言いますと、「キリストがあなたがたを愛したように」というところから始めなさいます。

ローマ書に行ってみましょう。

ローマ人への手紙 5 : 8、10 (パウロ)

私たちがイエス様の仲間、同僚、友人、理解者であった時ではなく、「罪人で、敵であった時、キリストが私たちのために死なれることをもって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにされた」とあります。

私たちが愛されるのに相応しいからでもなく、私たちの方から先に神様に「愛してください」と愛を要請したのでもなく、そんな愛があるなんてことをちよびつとも知らなかった時、いやそれどころか、反感、敵対心、不快感、むかつき、もどかしさを抱き、知ってか知らずか神に背を向けていた時に、父な

る神様は、見えない神の御姿なるお方、ひとり子、全く罪なき完全な義であられるキリスト・イエス様を十字架に架け死なせることをもって、私たちにご自分の愛を明らかにして下さいました。

こんなイエス様の姿に倣って、「少しでも愛するということを実践してみよう」と試みようとした時、自然と期待してしまうことは、相手がそれにほんのちょっとでも気付いてくれ、微かでもいいから反応してくれ、ちょっとでも良いから視線を向けてくれ、ちょこっとでもいいから悪びれる様子を見せてくれること。

そうすれば、報われた思いになるし、がぜんやる気も出る。

でも、もうこう思った時点で、その実践しようとした愛は、もう愛ではないということ、このローマ書のイエス様のお姿から教えられてしまいます。

イエス様は、そんな愛を装った愛もどきではなく、余すところなく完全な敵であり、罪人であった私たちのために死なれたことをもって、愛を明らかにして下さいました。

「愛とは、愛するがために敵のために死ぬこと、自らを捨てることだ」とその身をもって明らかにして下さいました。

それゆえに、私たちが人に向けて裁きの言葉を吐き捨てる前に、何を真つ先に思い返さなければならないのかと言いますと、「私は神の前に、イエス様の前に、どんな条件で、どんなレベルで、愛を受けたのか」ということですね。

「私たちのうち誰が、人を裁くことの出来る資格があるのだろうか?」、そして、今日の御言葉エペソ書5：2、

エペソ人への手紙5：2（パウロ）

という御言葉の内容を思い起こさずにはいられなくなります。

Part Three

使徒パウロがこの御言葉を語る上で、頭の中に思い浮かべていた旧約聖書の内容・出来事があったように思われます。

「キリストが私たちを愛して、ご自分を神へのささげ物、いけにえとし、芳ばしい香りを献げて下さいました」というこの言葉は、創世記6章から8章にかけて記録されているノアの洪水の話を思い浮かべながら、書いている内容だと思われます。

創世記8章を見ますと、ノアの洪水が終わった直後に、ノアが神さまにいけにえを献げる場面が出て来ますが、その場面で、神さまが応答としてお語りになった言葉が、このエペソ書の言葉に繋がってきます。

創世記8：20－21（パウロ）

聖書において最も大事な場面のうちの一つだと思います。
ノアの洪水がなぜ起こったのかと言いますと、

創世記 6 : 5 - 7 (パワポ)

ということのために、ノアの洪水がもたらされました。
ノアの洪水が起こった最も大きな理由は、地上に蔓延り、増大する人の悪です。 5 節に、

創世記 6 : 5 (パワポ)

(みな《老若男女、一人残らず》、いつも《何をすることにしても、生涯》)
その心から考え出すありとあらゆるものすべてが、オギャーと生まれたその瞬間から、いやダビデの言葉を借りるならば、母が身ごもった時から、死ぬ瞬間に至るまで、一生涯弛みなく悪なのが、私たち人間だということです。

例えば、私たちが人を赦そうとする時、何を期待して赦しますか？

間違ったことをしたということその人が認め、気付き、再度その間違いを繰り返さないことを期待し、また約束の下赦します。

でも、ここでは、何と言っていますか？

「その期待、水の泡です」と言います。

期待したところで、期待通りにはならず、また同じようにその悪さをしでかすのが、私たち人間です。

人は一生涯、悪です。

10 歳、20 歳、30 歳、40 歳、50、60、70、80、90 歳、100 歳、110 歳、どんなに長く生きたとしても、生きている限り悪です。

だから、ノアの 8 人の家族以外のすべての人を、地の面から消し去ることとなりました。

そうして、ノアの洪水がもたらされましたが、そのノアの洪水の結果を見ますと、おかしなことに何も変わっていないことが書かれています。

創世記 8 : 21 (パワポ)

変なことにお気づきになりませんか？

6 章で、「人は悪だから地の面から消し去った」というからには、「ノアの洪水の後の世界、その世界の人々は良くなった」とか、「改善点が見られた」とか、「まあとりあえず、見ていられるレベルにはなった」とかが、神さまの口から宣言されることが当然のように期待されますが、何と言っておられますか？

「人の心が思い図ることは、幼いときから悪であるからだ。」

何も変わっていません！

おかしいですね。

6章では、「悪だから滅ぼした」のに、8章では、「悪だから滅ぼさない」と仰います。

つじつまが合わないような話になっていませんか？

じゃあ、ノアの洪水の前と後では、何が違うのか？

洪水の前と洪水の後で、同じく悪であるにも関わらず、一方は神の裁きがあり、一方は神の裁きがない。

この二つの間にある違いは何でしょう？

「主は、その芳ばしい香りをかがれた」という違いですね。

ノアの洪水の前と後の決定的な致命的な違いです。

祭壇の上で殺され、燃やし尽くされ、献げるいけにえの芳ばしい香りがあったのかなかったのか。

ここに、「私たちを愛して、私たちのために、ご自分を神へのささげ物、またいけにえとし、芳ばしい香りを献げてくださった」イエス・キリストが表れるわけです。

ペテロの手紙第一 3 : 18 - 21 (パウロ)

創世記6章と8章に出て来る人の姿は、変わらず悪なのに、何が違うのか？

「私たちを愛して、私たちのために、神への全焼のささげ物、いけにえ、芳ばしい香りとなってくくださった」屠られた子羊イエスが、いるのかいないのかという大きな違いですね。

ノアが乗り込んだ箱舟、そして、献げたいけにえは、イエス・キリストを表すと言うのです。

変わらず悪だけれども、キリストという箱舟に入るという福音を聞き、箱舟に入る決心へと導かれ、水の裁きより救われた箱舟ゆえに、さらには、神の御姿なるキリストご自身が、私たち罪・悪そのものである者たちの身代わりとなって献げられた罪なき、悪なきささげ物であると信じる者たちは、なお変わらず、悪だけれども、今度は水ではない、火と硫黄によって跡形もなく滅ぼし尽くされる最後の審判より救われ、新しい天と新しい地に神の子として迎え入れられる、これが、聖書の語る救いであり、神の愛ですね。

滅びることが決まっているこの地上世界の色々な何かから救われることを、キリスト教では救いとは言いません。

でも、何だかおかしいことに、「この地上の何かから救われること」という矮小化した人間的な、可視的な、生活における思い煩いや富や快樂的な救いばかりを、ややもすると求めて生きてしまう、悪である私たちの霊的愚鈍さを覚

えずにはられません。

でも感謝なことに、本当に感謝なことに、変わらず悪であるけれども、終末的な滅びに至ることはないという救いの下、キリストを信じる者たちすべてが愛のうちに生かされております。

Part Four

ある意味私たちは、本当に変わりません。

先週は、「変わる」と、「変えられている」と言いましたが、聖人君子になって行くという意味での変わり方ではなく、人のことを言っている場合ではないくらいに根深い罪人であるということに、より気付いていくという変化であり、悪が薄まるというような変化ではないですね。

もちろん、成長し、成熟し、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するという聖化が約束されていますが、変わらないですね。

罪深いという意味で変わらないですね。

「あ、なんか昔より良くなったなあ」と思ったその瞬間、全然変わらず自分が見えていない高慢という悪が、変わらず住みついていることを露呈してしまいます。

何か罪なことをしようとした時、昔のようにやらなくなったやれなくなったのは、私という人が良くなったからではなく、神さまが妨げ、神さまがその機会を奪い、神さまが弱さを与え、神さまが恵みをもって守って下さっているからですね。

例えば、どこかお店で「この野郎！」と口からつい出てこようとした瞬間、「洪先生～」という声がどこからともなく聞こえて来てそちらに気を取られたとか、

何か悪いことが心のうちに思い巡らされてやってやろうと思ったけれども、その日に限って電車がバスがやたらと遅く来て、「次の日にしよう」と思ったけれども、寝て起きたらどうでもよくなったとか、

世の中と全く変わらない価値観やものさしで戦い、出し抜き、稼ぎ、勝とうとすると、なぜだか心がチクチク痛み、「それでいいのか？」という考えのような声のようなものが寝ても覚めても離れない。「ああ、もう苦しい。いいや損しても。いいや負けても。いいや赤っ恥かいても」と思えるのは、以前よりも賢くなり、正義感が増し、物事を見極められる経験や知恵が付いたり、罪を犯そうとする力が以前よりも弱まったからそうなのではなく、いくらでも抜け道を探して悪を働こうとすることをそう出来ないように、恵みの内に、天の軍勢を送って下さって、すべてを働かせて神さまが聖なる邪魔をし、内なる聖霊によって守っていて下さっているだけで、さもなくば、隙を見つけて罪犯そうとする根性が変わらずあるのが私たちです。

じゃあ、そんな私たちが愛するためには、どうすればいいのか？

今日の御言葉にヒント、答えがあります。

エペソ人への手紙5：2（パウロ）

キリストが私たちを愛したために、ご自分を捨て、死なれたように、自分を捨て、死ぬこと。

これが、愛するために必要なことです。

皆さん、皆さんがイエス様を信じて、払った最も大きな犠牲は何でしょうか？

イエス様を信じる前と信じるようになってから変わったこと、さっきは変わらないと言いましたが、何を犠牲にし、何を放棄し、何を譲歩したでしょうか？

時間、それまで愛して好きでたまらなかったことやもの、または、イエス様を信じる信仰を持ったがために理解されなかったり、冷やかしや嘲笑いを受けることもあったかもしれません。

でも、ここで一つ考えたいのは、私が持っているものを放棄することと、私を放棄することとは、全く次元が違うということです。

私が所有しているものを放棄することは、そこに利害関係が生じることであり、私が損すればいいだけのことで、私という存在はなおもそこに残ります。

しかし、私という人そのものを放棄することは、そこに、私という人の存在さえも残りません。

私たちが何か人の関係において、または物事において譲歩する時は、私という存在を、それでも守るために譲歩します。

何かを放棄し、諦めることをもって、私という存在を守ります。

私という存在そのものを放棄するという事は、出来ないですね。

でもイエス様は、この地上に来られた時、何かご自分が持っているものを与え、放棄し、諦め、犠牲にして、ご自分を守るために来られたのではなく、ご自身そのものを与え、諦め、放棄し、犠牲にされました。

利害とか、守るとか、譲るとか、裁くとかではなく、ご自分を捨てるために、死ぬために、仕えるために来られました。

弟子たちの足を洗い、嘲笑を受け、その顔に唾を吐き捨てられ、鞭打たれることのみならず、ご自分という存在そのものを差し出されました。

これと同じことを、「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしについて来なさい」という言葉をもって、聖書は私たちに要求しています。

「私はこれから謙遜になって、生きたいと思います」という言葉だったり、思いだったり、決心だったりをすることがあるかもしれませんが、「謙遜になって生きる」と言っている時点で、矛盾になってしまいます。

まやかしのような言葉ですね。

「自分を捨て、十字架を負って」ということは、謙遜も、高慢も、禍も、祝福もありません。

イエス様に誰でもついて行きたいと思う者は、その存在自体がないのです。

イエス様について行ったという時点で、「私」という名で存在することはなくなってしまう。

イエス・キリストという名にあつては、あります。

イエス・キリストの手として、イエス・キリストの足として、イエス・キリストの口としてあります。

それ以外のことで、私たちは、もしキリスト者であるならば存在し得ません。

それが、聖書が私たちに教え、求めていることですね。

Part Five

こういう意味で、愛は、私たちの中から始まるものではなく、生まれるものでもなく、主イエス様のみから生まれ出てくるものです。

主に愛があるのであって、私たちに愛があるのではないですね。

もし、「私には愛がある」と言うならば、それは愛ではなく、高次元の同情でしょう。

自分の優越感を、最も巧妙に満喫することなのかもしれません。

愛とは、私たちが持てるものではなく、もし私たちに愛があるとすれば、それすべて、主イエス様の人として用いられたというだけですね。

つまり、愛を私たちが語り行う上で出て来るものは、ただ唯一、私たち自身を否定すること、捨てること、死ぬことをもってでしか出て来ません。

じゃあ、それが、私たちから出てきますか？

何度も行っていきます通り、出て来ません。

でも聖書は、イエス様は、神さまは、「じゃあ、出来ないならそれでいいよ」とは言いません。

「キリストがあなたがたを愛したように、愛されている子どもらしく、愛のうちに歩みなさい」と、実際的な愛を求めてきます。

じゃあ、どうしましょう？

祈るしかないですね。

「神さま、あなたは私に、『愛しなさい』と仰いますけど、私には到底できない芸当です。奇跡を起こしてください。愛するという奇跡をお与えください」という祈りが出て来て然るべきですよ。

奇跡という言葉は、愛するというところにこそ使う言葉だと思います。

「神さま、どの病院でも、どのお医者さんでも、この病気を治すことが出来

ません。どうか主よ、癒しの奇跡をお絶えください」と祈り、これが応えられたという証しがあるのならば、なぜ、愛するというこのために、私たちは奇跡を求めないのでしょうか？

「イエス様、私からは到底ひっくり返っても、叩いても、愛は出て来ません。愛する力もありません。でも主は、愛することを私たちに求めておられますから、どうかどうか、愛するようになしてください。愛する愛を下さい。私が死に、キリストが生き、キリストの手として、足として、口として、愛を行わせてください。」

私たちがもしクリスチャンであり、教会であり、キリスト者の群れであるならば、愛が冷えていることにこそ危機感を覚え、愛がないことに衣を裂き、灰をかぶり、愛が実践される奇跡を願って祈らなければならないと、なおも語り掛けられています。

主イエス様の前にあって、愛するという以上の奇跡は、私たちにはありません。

愛するというこのこと以上の信仰もなく、愛するというこのこと以外に、父なる神が、御子なるイエス様が、聖霊なる神様が、私たちに求めておられることはありません。

Conclusion

最後に、愛するという奇跡の祈りを祈り、愛するという奇跡を、死をもって体験した方の御言葉を読んで終わりたいと思います。

使徒の働き 7 : 54 - 60 (パウロ)

「わたしについて来たいと思う者は、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしについて来なさい」というイエス様の言葉を、自らの祈りとして祈り、ステパノは、自分を石で打ち殺した敵を愛するという奇跡を、イエス様の手として、足として、口として表しながら、死んでいきました。

そして、ステパノを殺すことを喜んで主導したのが、サウロと呼ばれていたエペソ書の著者使徒パウロでした。

この奇跡の祈りは、パウロへと受け継がれ、今、私たちにも語られ、促されています。

どうか、今読みましたこの御言葉を負担に思わず、私たちも出来るところから祈っていきたいと思います。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ書 5 : 2